



146号

2009/9/1

日中文化交流市民サークル‘わんりい’

東京都町田市能ヶ谷町 1521-58 田井方

〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100

http://wanli.web.infoseek.co.jp/

Eメール:wanli@jcom.home.ne.jp



〈学校が休暇の季節は…〉(写真説明20p)

於:中央ケニア・ニエリ県・キアカンジャ村 2007年10月26日

撮影:ガスバレイ・ミグイ・キルス(アフリカンコネクション)

‘わんりい’146号の主な目次

北京雑感(37)「北京の市場Ⅱ」	2
媛媛講故事(16)「白蛇伝Ⅱ」	3
私の調べた四字熟語(35)「大逆無道」	4
松本杏花さんの俳句集・「余情残心」より	5
「水墨画のおすすめ」	6
土の香りのモダンアート(2)「農民画の始まり」	8
アフリカとの出会い(35)「私の理想の村」	9
スリランカ紹介(31)「ジャフナ珍道中Ⅵ」	10
9月の歌「哆啦A夢」ドラエモン・歌詞	11
ラオス・山からだより「G村滞在記」(2)	12
私の四川省一人旅(27) 亜丁⑭	14
中国河南省開封市「河南大学」での30日	16
四姑娘便り「成都～パンダの里・臥龍への道路事情」	18
中国を読む(61)「深夜特急3・4・5・6」	20
映画「犬と猫と人間と」	20
‘わんりい’ 掲示板	21

♪♪「中国語で歌おう!会」9月の歌 ♪♪

楽しく歌って夢を叶えよう

「ドラえもん」(哆啦A夢)

中国の子どもはみんな歌えるという「ドラえもん」の主題歌・中国語バージョンを歌います。(歌詞11p)

於:まちだ中央公民館 7F・第一音楽室

JR 横浜線町田駅八王子寄り改札口徒歩2分、小田急線南口徒歩5分町田東急裏 109 ファッションビル 7F

9月18日(金) 19:00 ~ 20:30

●指導:趙鳳英 (中国人歌手)

録音機をお持ちの方はご持参下さい。

●「中国で歌おう!会」
10月の講座日:10月16日(金)

*初めてご参加の方は、会場、日時など‘わんりい’事務局(☎042-734-5100)へお問合せ下さい。(体験無料)

最近の北京では、スーパーマーケットが「超市^{チャオシー}」と呼ばれて、人気を博しています。フランスのカルフル(家楽福)やアメリカのウォールマート(沃尔)が進出して、大規模な店舗を展開しています。北京で勢力を伸ばしているカルフルは、北京中でかなり多くの店舗を構えているようですが、私の知っている4箇所でも、連日大繁盛で、レジが30以上も並んでいるのに長蛇の列が出来て、精算に20分もかかるのが普通です。

スーパーの品揃えは日本と同じで、ありとあらゆるものが並んでいます。私がよく行った首都体育館近くのカルフルは、入り口にアメリカのスーパーにあるような大きなカートが置いてあります。日本のスーパーにある籠もありますが、その籠を一つだけ、或いは上下に二つ乗せるような小さなカートはありません、少量の買い物なら、小さな籠を手を持って歩くしかありませんが、殆どの人は大きなカートを押して歩いています。一階に電器製品・時計・CD・本・衣料品・寝具・靴等が並んでいて、地階へは歩道式エスカレーターで降ります。因みに、一階には出口がありません。レジは地階にだけしかありませんので、一階で買い物が終わっても地階へ行かなくては支払いが出来ないのです。

地階へ降りると、そこは魚と肉類の売り場です。魚は殆どが量り売りで、山のように積み上げられた冷凍や半解凍の甲殻類や魚介類を自分で好きなだけ袋に詰めて、売り場の一角にある計量の係員に渡して、秤と連動して出てくるラベルを貼ってもらいます。

魚売り場は、凡そスーパーの中らしくない雰囲気、床は濡れているところがあったり、独特の臭気があってハエが飛んでいたりします。正直な所、あまり清潔な感じはしません。何年か前に、カルフルの魚に蛆が湧いていたと言う出来事があり、新聞で大きく取り上げられましたが、この臭いとハエが飛びまわる様子を見れば、当然起こりうる事件と納得してしまいました。この点、以前からある食品市場の魚屋さんでは、魚は小さいながら流水の生簀で泳がせて売っていましたが、エビなどは小出しにして売っていましたが、ハエは飛んでいても商品に止まるチャンスは非常に限られていましたから、こんな事故は起こり得ません。

中国の人々は、魚を生きたまま売買することが多くて、ちょっとしたレストランで魚料理を注文すると、水槽から掬い上げて生きたままバケツなどにいれてテーブルまで持ってきて客に見せてから料理していたのに、スーパーでこんな商品をよく買うなアと、変な所に感心しました。

魚売り場の隣は肉売り場です。始めのうちは、焼豚や^{ラーロウ}腊肉と呼ばれるベーコン、ハムなど加工品はもとより、生肉も塊で置いてあり、客の希望に副って切り分けて売っていましたが、次第にパックで売られるようになって来ました。

それから野菜売り場が続きます。野菜の販売は、量り売りとパック詰めが半々でしたが、これもパック詰めが段々多くなるようです。パック詰めされた野菜の品質はあまり良くないのに、割高です。私なら外の市場で選んで買うところですが、北京の人々はスーパーで買うのが好きなようです。果物はばら売りが断然多く、種類も外の市場と比べて遜色ない、或いはより豊富だと言えるかも知れません。但し値段はちょっと高めです。

その後、乳製品・食料品・パン・麺類・お菓子・化粧品・衛生用品等々の売り場が続き、どれもこれも、種類・品数共に豊富で、日本の大規模スーパーの少なくとも3倍はあるように感じます。そして、不思議なのは、地階の面積が地上階の面積より広いように思えることです。地階は道路にはみ出しているのではないかと思うほど広いのですが、こんなことは北京のお店ではよく有ります。入り口は狭いのに、奥に入ると思いがけず広い空間が開けたり、奥へ細長く続く本屋さんの中ほどで左に折れるとCDコーナーがありますが、外からは分かりません。これは海賊版CDを売るための工夫だそうです。こんなのは論外としても、北京の街には意外性が満ち溢れています。

さて、買い物で一番大事な価格です。日本の感覚では食料品はスーパーが安いと思いますが、北京では必ずしも安いとは言えないような気がします。日用雑貨について、スーパーの強みは、何と言っても種類が多いことでしょう。値段もデパートと比べれば随分安いようです。しかし、生鮮食品(魚・肉・野菜等)に関しては、外の市場と比べて高めですし、品質も決して良いとは言えません。私は、生鮮食品をスーパーで買う気はしません。

このスーパーの様子は2年前のものです。日進月歩の北京ですから、今ではいろいろ改善されていることを期待しています。

スーパーが進出する前、北京の人々は、買い物を高級品はデパートで、日常の衣類・消耗品は近くの日用品市場で、食料品は食品市場で、買い忘れは便民店でと使い分けていましたが、スーパーが出来てからは、かなりの部分をスーパーで済ませる人が多くなりました。現在、大型スーパーでの買い物は、北京の人々にとってちょっとしたステータスシンボルになっているようです。

許仙は白娘子の気品に溢れた顔立ち、しとやかな立ち居振る舞いにすっかり心を奪われてしまいました。そして付き合っているうちに二人の相手を想う気持ちはだんだんに深くなり熱い恋に落ちました。二人のそんな様子を見るのが嬉しい小青は何彼と許仙と白娘子の二人を励ましてはいろいろと結婚の準備をし、ついに二人は結婚しました。

許仙は元々生薬屋で働いていましたので、結婚した許仙と白娘子は生薬屋を開き「保安堂」と名づけました。二人は真面目に商売をし、また心を入れて患者を診療したりして、人々の難病を治しましたので間もなく二人はそのあたりの有名人となり商売も日増しに繁盛して行きました。

しかし、「保安堂」が繁盛すればするほど或る人の機嫌を損ねることになりました。或る人というのは「金山寺」の法海というお坊さんです。許仙と白娘子の店の周辺では誰もが「保安堂」で薬を調合してもらい、病気を治して貰ったので菩薩の保護を求める必要がなくなりお寺にお布施を上げに来なくなったからです。法海はいらだたく思い、この「保安堂」という生薬屋はいったいどういう人がやっているのかを見に出掛けました。店を覗くとちょうどその時、白娘子が患者を診療しているところで、その姿を見た法海は「あれはあの白蛇めじゃないか!」と大変びっくりしました。

実は、この法海はかつて西湖の中で白蛇に負けた亀なのです。白蛇に負けた後西天まで逃げて、如来佛の蓮花宝座の下に身を隠してずっと如来佛の説経を聞いていましたが、卑しい品性は一向に変わらず、如来佛が居眠りした際に如来佛の三つの宝物である「金鉢」、「袈裟」、「禅杖」を盗んで下界に下ると、自らを法海和尚と名乗り「金山寺」お坊さんに変身していたのです。

話は戻って、白娘子を見た法海は復讐の念を抱くと策を巡らしました。そして法海は許仙に「商売繁栄をお祈りします」と言葉巧みに誘い掛けたので、許仙がお布施を

上げると法海は重ねて

「願い事があれば五月の五日、つまり端午の日に金山寺に来てください。重要な話があります」と言いました。

許仙は喜んで承諾しました。そして五月五日、許仙が「金山寺」を訪ねると法海は、

「信じられないかもしれないが、実はあなたの奥さんは白蛇の妖怪なのです」と告げました。

「え! なんてことをいうのですか。私の奥さんは優しく、賢く、妖怪であるはずはない!」



許仙は思わず大きな声で反論しました。しかし、法海は「信じられないなら、家に帰ってこの雄黄酒を奥さんに飲ませてご覧下さい。きっと白蛇の姿になる」と言いました。法海の確信ありげな言葉に許仙は半信半疑ながら法海から貰った雄黄酒を持って家へ帰りました。

中国では、古くから端午の日に、雄黄酒を飲んで魔よけをする習慣があるのです。その夜、晩ご飯の時、許仙は法海に言われたとおり「今夜は節句だから雄黄酒を飲もう」と白娘子に勧めました。白娘子は気分がすぐれないと何度も断りましたが許仙があまりに強く勧めましたので仕方なく飲んでしまいました。

晩ご飯の後、気分が悪くなった白娘子は寝床に駆け込んで行きました。心配した許仙が帳をあけてみると、帳の中に大きな白蛇がとぐろを巻いているではありませんか! 許仙は驚きのあまり気を失ってしまいました。

(次号に続く)

【‘わりりい’の原稿を募集しています】

原則として、2月と8月を除く毎月発行の会報‘わりりい’は、会員の皆さんの原稿でまとめられています。体験された楽しい話、アジア各地で見聞した面白い話などなど気楽にお寄せいただければと願っています。

* 紙面の都合上、掲載までお待ち頂くことがあります。また、作者のご了解の上、余儀なく手を入れたり、カットさせて頂いたりすることもあります。

「情熱の歌人」として知られた与謝野晶子の夫君・与謝野鉄幹(1873年～1935年)もまた歌人であり、詩人であり、明治・大正・昭和と三代にわたって浪漫主義的な多くの詩を発表しました。また、北原白秋、石川啄木など俊才を世に送り出し、日本の詩壇に少なからぬ影響を与えた人物です。

その与謝野鉄幹に新宮・熊野出身の大石誠之助という親友がおりましたが、この人は明治天皇の暗殺を企てたとされる”大逆事件”に連座され、冤罪のまま絞首刑となりました。鉄幹は誠之助の死に際し、次のような強烈な詩を詠んでいます。

〈誠之助の死〉

大石誠之助は死にました、
いい気味な、
機械に挟まれて死にました。
人の名前に誠之助は沢山ある、
然し、然し、
わたしの友達の誠之助は唯一人。
わたしはもうその誠之助に逢はれない、
なんの、構ふもんか、
機械に挟まれて死ぬやうな、
馬鹿な、大馬鹿な、
わたしの一人の友達の誠之助。
それでも誠之助は死にました、
おお、死にました。
日本人で無かつた誠之助、
立派な気がひの誠之助、
有ることか、無いことか、
神様を最初に無視した誠之助、
大逆無道の誠之助。
ほんにまあ、皆さん、いい気味な、
その誠之助は死にました。
誠之助と誠之助の一味が死んだので、
忠良な日本人は之から気楽に寝られます。
おめでたう。

*この詩の下から6行目で“大逆無道”が使われています。

辞書を調べてみますと、

三省堂 大辞林では、

「大逆無道：はなはだしく人倫にそむき、道理を無視した行為。」

小学館 中日辞典では、

大逆無道(だいぎゃくむどう)

三澤 統

私が調べた四字熟語 35

「大逆無道(dà nì bù dào)：大逆無道。封建社会では特に人民が君主に反逆することをさした」とあります。

(中日辞典では大逆無道が大逆無道と同意義で扱われています。)

この成語の出自は《漢書・高帝紀》の次の部分です。

「汉王数羽曰：“夫为人臣而杀其王，杀其已降，为正不平，主约不信，天下所不容，大逆无道，罪十也”」

(漢王の劉邦が項羽の罪状を列挙して「臣下が自分の主を殺し、既に投降した者を殺し、政治は公平を欠く、大事な約束を守らない。このようなことは天下の何処においても許されることではない。大逆無道の罪状は十条にも及ぶ」と言った。)

紀元前2世紀、秦・始皇帝死後、楚の項羽と後に漢の高祖となる劉邦は力を合わせ、秦を滅亡に追いやりました。しかし、劉邦が項羽に先駆けて関中(西安を中心とした一帯)を落したにも拘らず、項羽の力に恐れをなした劉邦は関中を項羽に譲り、辺境の漢中(四川盆地・巴蜀)の王に封ぜられ、劉邦はこれを不服に思っていました。

そんな劉邦に、ある日項羽は一大決戦の宣戦布告をし、以後、二人は天下の覇権を争って泥沼のような「楚漢の争い(第28回“論功行賞”の注記②参照)」を続けることになりました。

この宣戦布告に答えて劉邦は

「我等両者はともに楚の懐王の命を受けて戦いを開始したはずだ。その時の約束では、先に“関中”を陥れた者が王になるということであった。わが方が先に“関中”を落したが貴殿は信義を踏みにじってわが方を巴蜀へ追いやり自分が関中の王になってしまった。これが貴殿の第一条の罪状。

また、貴殿は越国に救援に行く途中で、上將軍(將軍の位名)の宋義を殺して、自分が取って代わって上將軍と称した。これが貴殿の第二の罪状。

また、貴殿は懐王の命令に背いて自分勝手に各諸侯の兵馬を動かして、中国の東北地方から中央部へ侵入した。これが貴殿の第三の罪状。

劉邦は続けて、項羽は秦の宮殿を焼き払い、秦

の始皇帝の墓を掘り起こして財宝を取奪し、また投降して来た秦王子の嬰(王子の名)も殺した。また二十万人にも及ぶ秦国の投降兵を生き埋めとし、義帝(懐王)を殺害したこと等、項羽の罪状を次々に列挙しました。

第十条までの罪状を述べ終ると、劉邦は次のように言いました。

「貴殿は臣下の身分でありながら主人である懐王を殺害し、既に投降した人々を殺害した。貴殿の政治は公平を欠き、貴殿の約束は履行されない。このような有り様では、とうてい天は貴殿を許さないであろうし、大叛逆というべきものである。貴殿はかくの如く十の大罪を犯したのだ。わが方は仁愛と正義のために軍隊を興し貴殿を逆賊として討伐する。貴殿はわが方のこの挑戦に対し反論することができるのか？」

項羽は劉邦が罪状を述べるのを聞いて体中いきりたち、何も言い返すことすらできず直ちに弓矢手に劉邦に向けて矢を放つよう命令を下しました。

【トピックス】

〈おめでとう！任書剣さん〉

映画「私の叙情的な時代」(監督：任書剣)、
<http://sub.recordchina.co.jp/mv/cs/nin.html>
 「PFFアワード2009」で企画賞と技術賞2部門で受賞

‘わんりい’の活動の一環として、皆さんに何回か鑑賞頂いたドキュメンタリー映画「蒲公英の歳月」「北朝鮮の夏休み」などを企画・監督された任書剣さんのお名前は記憶の方も多いかと思えます。

「PFFアワード2009」は世界最大の自主映画コンペティションといわれ、第31回目の今年は東京国立近代美術館フィルムセンターと共催で催されました。

「私の叙情的な時代」は任書剣さん自らがシナリオを書き監督した初めての劇映画ですが、569本の応募作品の中からコンペティション部「PFFアワード2009」参加作品として入選の16作品に選ばれました。7月末に選考を通過した他の作品と共に、フィルムセンター・大ホールで正式上映され、企画賞と技術賞の2部門で受賞を果たしました。これからの更なる活躍を期待したいと思います。(田井)

松本杏花さんの俳句「余情残心」より

野分あと重き荷を負う大連港

qiūfēng sìnuè kuáng
 秋风肆虐狂

dàliángǎng nèi tūntǔ máng
 大连港内吞吐忙

chénzhòng jízhuāngxiāng
 沉重集装箱

日语季语中的“野分”指深秋的狂风、是说风可将原野的草木吹开。

赏析：此首为作者在我国东北地区地写生句。

大连港是我国东北地区最大的港口、为该地区物资吞吐地集散地。句中所说的沉重货物、暗示着港口承担的巨大任务。该地区冬季运输尤为不便、所以好多货物都要赶在人冬之前集散。本句描写了暮秋时节大连港为完成繁重任务的忙碌景象。

駕籠かきの肩に付き来る赤とんぼ

jiàofū jiànbù xíng
 轿夫健步行

shān jìng qíqū jiān wěn píng
 山径崎岖肩稳平

zhāo lái hóng qīngtíng
 招来红蜻蜓

季语：红蜻蜓、秋。

赏析：作俳句是削除艺术、犹如特写镜头、将焦距集中在一点。本句中、作者将焦距凝缩在了轿夫的双肩上。担途一般无需轿夫、乘轿者的舒适要依靠轿夫的肩膀。任脚下的路多么崎岖不平、多么坑坑洼洼、轿夫都力保肩膀平稳。

我国的国画中常有蜻蜓歇息在荷尖上的作品、表现出了荷塘的宁静。此句用红蜻蜓欲落在轿夫肩上歇息来表现平稳、以静表现动、创意新颖。

水墨画はその名前の通り、水と墨の芸術です。水墨画に使う道具は少なく、水と墨以外に筆と紙があれば、水墨画を手軽に始められます。これは書道と同じです。

中国には「書画同源」という言葉があります。漢字は象形文字でしたので、もともと描かれた絵でした。また、書と絵の制作上の考え方も同じです。例えば、一本の線を描くとき、滑らかできれいな線より、味のある線を描いた方が面白みがあります。面白いのは、あまり訓練を受けてない人の方が味のある線を描くことがあります。練習をつんで運筆に慣れるとかえって堅苦しい面白みのない線になってしまうことがあります。その場合、もう一度初心の状況に戻る必要があるでしょう。「拙」から「巧」になり、また「拙」に帰えれと言われるのは、水墨画また書道の一般的な考え方といえます。

「巧」を追求しないということは、対象をそっくり描かないということを意味します。例えば、お皿の絵を描くときに、その丸い口を遠近法できれいな楕円形を描くより、歪んだ楕円を描いた方が水墨画では面白かったりします。また、テーブルの上に置いたお皿の丸い底を直線でもよいのです。このような描き方は西洋絵画に慣れた人にとっては少し抵抗があるかもしれませんが、古代中国の人々は違和感なく、それを楽しんでいました。子供も同じように絵を描きます。子供は側面から見た汽車を描き、それを真上から見たレールに乗せてしまいます。ある意味で、水墨画を描く心構えは子供の描き方と似ています。東西を問わず、子供のように世界を感じ、世界を描こうとする画家も多数おられます。

子供の絵には光や影は存在しません。水墨画も本来は描く対象の光や影は表現しないのです。しかし、写真を見て絵を描く人は、写真に写った光や影をそのまま画面に描こうとします。これは水墨画の本来の姿ではありません。写真に束縛されて自由に絵を制作ができなくなるからです。

さて、水墨画は主に二つの方法で対象を表現します。一つは、対象の輪郭を線で表現する方法です。これは「鈎勒法」(線描)と呼ばれます。例えば、右上の石濤(注)さんのこの菊の絵は、菊の花びら一枚一枚を輪



郭線で表現しています。もう一つの表現法は、「没骨法」と呼ばれ、対象の輪郭線を描かないで、形を墨の塊で表現する方法です。菊の葉は「没骨法」で描かれたものですが、葉には陰影や輪郭線が一切なく、形自体もはっきりしていません。対象の光と影を描かないことで、墨の濃淡などを自由に作り出せているのです。

物は誰でもその物をイメージできる普遍的な姿を持っています。水墨画は対象の個別性より普遍的な姿を決まった描き方で表すことが多くあります。この描き方が定着すると型ができます。昔から、中国水墨画を学ぶ人々は、まず先人の絵を模写し、その型を覚えます。その後それらの型を自分の絵の構図に合わせて応用します。例えば、蘭は葉が基本的に3枚1組で、決まった交わり方で描かれ、沢山の葉があっても基本形を積み重ねて描いてゆきます。山水画の場合も山や木などに決まった描き方があって、山の質感を表現する「皴」(しゅん)の方法は十種類以上もあり、描こうと思う自然の山の姿に合う「皴」の型で描きます。

若しかしたら皆さんは、このような描き方をしたら誰が描いても似たような絵になってしまうのではないかと思うのではないのでしょうか。確かに、昔の中国水墨画家達は互いに学び合い、学ばせてもらった画家の名前を自分の絵の上に明記する慣習もありました。著名な画家の名前を書くことで、自分の絵の正統性をアピールする意味合いもありました。ですから自分なりの絵画の型を作り出せない画家は優れた画家となる事はできませんでした。

複雑な対象をわずか数種類の型にすることは、ある意味で絵を学びやすくさせます。型が自在に描けるようになったら絵画の制作は、画面の上でいろんな型を様々に組み合わせることに専念すればよいのです。これは将棋やチェスに似ていますね。各駒にはそれぞれの役割があって、駒を一定のルールに従って動かして遊びます。水墨画も決まった駒(木や岩のパターンなど)を画面構成のルールに従って画面の上に並べて遊びます。この遊びは一人でもできますので、古代中国人は「琴、棋、書、画」を同レベルの高尚な趣味として楽しんでいました。

将棋やチェスで遊ぶように水墨画制作のルールを知れば、画面に置く諸要素の秩序と調和を考えて誰でも水墨画を描くことができるのです。ただ、絵画のルールは、画面の諸要素が将棋やチェスのように一定ではありませんから明確な言葉でそのルールを説明できません。しかし、水墨画は西洋絵画に比べて定型化された描き方がありますし、描き方も美的に定型化されており、日頃の修練で習得されていけば、自然に絵画制作のルールを理解できるようになる筈です。水墨画は、初心者でも「絵心のない」と思っている人でも上達しやすいといえます。

水墨画の画面構成は、西洋画と共通点も多いですが、一方、中国水墨画では「気」というものが求められ西洋画との根本的な美意識の違いといえます。中国文化の多くに「気」という概念があるといわれますが、その真の意味は「中国人」自身でも理解する人は少ないでしょう。言葉で「気」を説明するのはとても難しいのですが、水墨画において「気」とは画面上のすべての要素がまとまり、ある統一体として感じさせる力といえます。「気」が理解できれば、絵画制作のルールが身についたといえ、ゲームを楽しむように絵を楽しんで描けるようになるでしょう。

古代中国では水墨画は文人画とも呼ばれました。

文人とは主に科挙試験に合格して官僚になった人たちで、彼らは公職の傍ら趣味として書画を楽しんでいました。文人たちは全ての時間を絵に注ぎ込むことはできませんので、水墨画はだんだん簡潔なスタイルになり、短時間に一気に仕上げることも多くなりました。簡単な画面を内容豊かに見せるため、文人たちは身についた他の教養、即ち書や詩を画面に書き加えるようになりました。こうして水墨画は高められ画家の地位も向上してゆく一方、普通の人でも気楽に水墨画を描いて楽しめるようになって来ました。

水墨画は対象の写実的な追求から離れたことで、こころの表現を重視するようになりました。多くの場合、水墨画に描かれた対象は画家が自分の心を表現するためのモチーフであり、画家の精神が絵にどのように表現されているかが評価されます。

そのようなこともあり水墨画家は、題材を選ぶにあたって象徴性のあるものを選びます。例えば、竹の節は節操の象徴であり、なかが中空である竹は、虚心の同義語として好まれよく描かれました。そのため、竹は描き方も型がたくさんあり、初心者が入門の練習材料として竹は格好の題材となっています。ところで水墨画を学ぶことは、新しい教養を身につけることだけではありません。知らず知らず新しい世界観が形成されます。光や影をもつ世界は変化し続けますが、本質的な変わらない部分は心深く沈殿し、水墨画はそれを描き出そうと努めます。身の回りの世界を細かく観察続けることで、普段何気なく過ごした世界は新しい姿に見えてきます。禅語に「日々是好日」という句があります。絵を描くことは、まさに「日々是好日」を自ら体験し、また実践することなのです。

注：石濤(1642～1707)清時代初期著名な画家。山水画に優れ、書、詩と篆刻にも堪能だった。その作品と画論は近代中国水墨画に大きな影響をもたらした。

会員募集中！「**つるかわ水墨画を楽しむ会**」

<http://www.geocities.jp/manboinsea/lecture.html>

講師：満 柏(日中水墨会 主宰)

於：鶴川市民センター(町田市大蔵町1981-4 駐車可)

第2、第4(月)午後14:00～16:00(見学自由)

詳細問合せ：☎042-735-6135(野島)

*満柏指導の水墨画講座は、上記のほか、鶴見、海老名、淵野辺、茅ヶ崎にもあります。お気軽にお問い合わせください。

私が出会った農民画は、中国の三大農民画のひとつである、(上海)金山農民画だったのですが、では、‘農民画’と呼ばれる絵画が生まれたのは、そもそもどのようなきっかけで始まっていったのでしょうか。

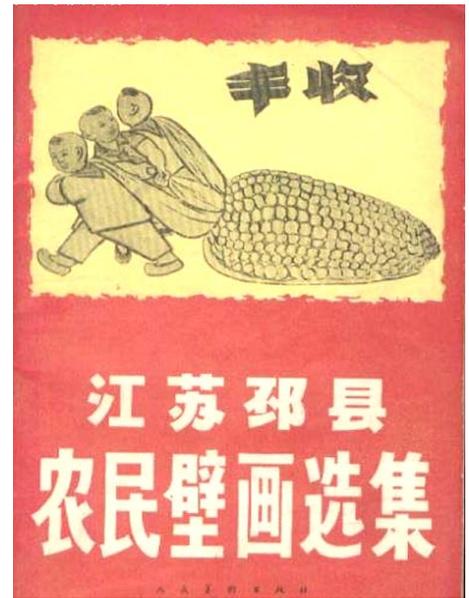
そのルーツは1958年の大躍進政策の時代にさかのぼります。毛沢東の提唱で展開された大增産政策は中国各地の農民たちの生活や思想に多大な影響を与えました。

中国人はスローガンが好き、というのはよく言われることですが、文字の読み書きが充分ではなかった農民たちは壁画という表現を使って仲間の意識を鼓舞し、また自分たちの夢を描きました。汽車で運ばれる巨大なとうもろこしを描いたもの、何人がかりかでないとい運べないくらい大きく育った農作物を描いた絵も陝西省や江蘇省で多く残されています。

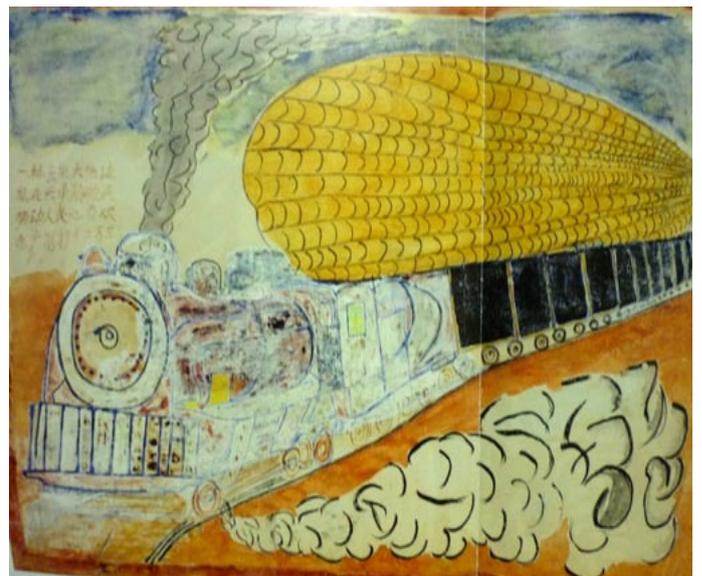
その後文化大革命の波が1966年に中国各地を襲い、皆さんがご存知のように、文化人・知識人はその粛清の対象となりました。しかし、農民たちは時代に従順に新しいスローガンを絵で表現してゆきました。「革命に尽力、生産にまい進」といった文革時代を彷彿とさせるプロパガンダ的な農民画がたくさん残されています。

こうして文化大革命を機に、農民たちは自分達の生活や夢を絵に描く方法と手段を手に入れ、以来、題材こそ変わっても途絶えることなく描き続けてきています。

今回は、文革後(上海)金山区にどのようにして農民画が育っていったのかをお届けします。



「江蘇省農民壁画集」の表紙
人民美術出版社 1958年刊



「はてしなく大きなとうもろこし」李乃梯 陝西省戸県農民画



「井戸を掘る」樊志華 陝西省戸県農民画



「英雄時代」范智友 陝西省戸県農民画

* 上海金山区文化曲・上海市金山区楓泾镇人民政府編集の「中国農民画」(2007年)より掲載の3点を選びました。

ナイロビから車で北上すること2時間。中央ケニアに属すKINAGOP(キナゴップ)という小さな村。土地が肥沃で農業が盛んで、羊やヤギを放牧する人も多く、牧歌的な村。開拓されていない土地が残り、まさに人類が足を踏み入れていない土地が多く残る場所だ。

この村に住む友人を訪ねて出掛けた。お互い携帯電話もなく、手紙で約束をしていた。その日、私はナイロビでの仕事が延びて、その村への最終バスに間に合わなかった。しかし、連絡は取れない。仕方なく朝一番のバスでその村へ向かった。出発して2時間後、目的の村に到着した。

バス停の前で、その友人&家族(お父さんお母さん子供3人)の合計5人で待っていてくれた。しかも、昨日の夜からだ。彼らの家は、待ち合わせのバス停から又別のバスで30分かかる。しかし彼らはその道のりを歩いてきていた。私は何度も何度も謝った。が、かえってくる言葉は「無事着いてくれてよかったのよ。本当に心配していたから」。その家には2泊したのだが、日々の隅々にアフリカ人らしい大きな愛情を沢山垣間見た。

こんなことがあった。

自転車が転倒して泥だらけになった私を、自分の服が汚れるのも気にしないで助けてくれたお父さん。そして一言、「泥だらけになった自転車もなかなかキュートだね!」いつも「笑う」ことを忘れない。

ご近所さんまでの道をひたすら歩く。時には30分も歩く。もちろんアポなしなので、行って見たら留守なんてことももちろんある。何度かっかりしただろう。でも同行の友人は、「留守だね。また来よう」の一言だけ。「こんなに歩いてきたのに」と、諦められない私に向かって、「君も同じだけ、いや、それ以上人ががっかりさせているんだろう。おあいこだよ」と笑う。

収穫した豆が風に吹かれて飛んでいった。一家が数ヶ月かけて育てた主食の豆にも拘わらず、「誰かのおなかを満たされますように」と祈りつつ見送った子供たち。

立ち寄った売店では、子供にお菓子を買ってあげようとした私に店主が一言。「その金でお菓子じゃなくて、この鉛筆を買ってあげなさい。差額はいいよ」という。

友人のお母さんは、なれない畑仕事を手伝った私に、そしてきっと迷惑でしかないその作業っぷりに、「本当に頑張りやさんね。神さまは見ていますからね」と最高の笑顔を見せてくれた。そのお母さんにお肉をプレゼントして、今夜のおかずにして貰おうとお肉屋さんへ行って1キロの牛肉を買う。「お金はいいよ。そこのお母さん、いつも野菜をくれるから」と肉屋。

そして地域の子供たちは、「歌を聞きにきてね」といっ



てくれて、「好きな時間でいいからね」と言い残す。好きな時間に待ち合わせ場所に行くと15人の子供たち。歓迎の歌、友達の歌いろいろ笑顔で歌ってくれる。ずっと私の出現を今か今かとまっていたのであろう。

もちろん、ケニアにも悪い人、泥棒、うそつき等一杯いる。外国人としていやな目にあうこともある。ケニアの農村は時間がゆったり流れているのでみんな焦ることなく優しいのではないかとも思った。しかし、私は今はそうは思わない。時間には関係なくここの人たちは優しいのでないかと思う。人々の人に対する大きな愛情。日頃の、ちまちましたことで怒ったり、怒られたりしていることって何なんだろうと感じる。そういう大きな大陸のような心を自分も持ちたいと思う。ほとんどのことは、「なーんだ、そんなこと」と心の底から思えるようになりたい。

私はこの村では、生きること自体が人生の目的に値することなんだと知った。何かを成し遂げるとか、こういう人物になるとかというような目標を実現する事が人生の目的というのではなくて、「人生とは、今生きていることそのものが喜びである」と知った。

そういう村を離れ、またナイロビのような都市に戻り、先進国日本に戻り、精神的な豊かさを忘れそうになる。村から遠く離れれば離れるほど、眉間にいつもしわを寄せているような生活ではなくて、心から人生の1ページを今日も謳歌しているような生活への憧れが強くなる。

何もなかったケニアの農村。でもすべてがあったようにも思えた。

そんな何もない村に魅せられて、私は2006年から少しずつこの土地を買っていった。2008年現在、いつの間にか4ヘクタールになった。近くに象が生息していることで有名なアバディア国立公園を臨むところだ。いつかここに住むことを希望しているが、いつになることだろうか。

前はジャフナへ通じる国道で、椰子から造った密造酒売りの店に長居しすぎて、大慌てで店を飛び出したところで終わりました。

ジャフナまでの残り約65kmを2時間弱で走りきる事は、地雷原での様に道路が整備されていて制限速度の40kmを維持して走る事が出来れば十分に可能な筈なのですが、此処までの道路事情を考えると相当に厳しいと思われます。案の定、ここから先の道路も穴だらけのガタガタ道でスピードを維持する事が出来ません。それにも拘わらず同行のスリランカ人の友人2人は密造酒を呑んでご機嫌が良くなって、道路の脇に放置された軍用車輛を見つけると車を停めて見に行ったりしてタイムリミットがある事を全く気にしていません。

ガタガタ道を可能な限りのスピードで飛ばしてようやくジュフナ半島の付け根にあたるエレファントパス (Elephant Pass) まで辿り着く事ができました。此処からパライのチェックポイントまでは10km程で時間は何とかかなりそうです。エレファントパスは「象のための細道」というシンハラ語を英訳したもので、その名の通り道路部分を含めて陸地部分の幅は20～30mほどしかありません。僅かな陸地の左右には浅瀬が広がっています。

ジャフナ半島に入るにはエレファントパスを渡る他は海路しか無いので、交通の要衝として政府軍とLTTEによって激しい争奪戦が行われた場所です。紛争時でなければ風光明媚な観光地なのですが、陸地から浅瀬にちょっと入った所には鉄条網が張られていて、そこから先には未処理の地雷と海中には機雷が敷設されているそうです。丁度干潮時だったので鉄条網までは歩いて行けそうでした。

間の悪い事に、エレファントパスに入って直ぐに放置された戦車の残骸が道端にありました。此処までの道中でも何度か戦車の残骸はあったのですが、どれも道路から離れていました。ところが今回は歩いて2～3mの距離です。二人の友人は生粋のスリランカ人、こんなチャンスを逃すわけがありません。車を停めるや否や戦車に駆け寄って、触ったり、上ったり大興奮です。

おいおい君達は、此処に戦車が残されているって事は此処で戦闘があって君達の同朋の犠牲者がでた事を忘れちゃったのかい、と内心思いましたが、実は、僕自身も好奇心に負け、時間を気にしつつ戦車に近寄ってみました。

車体には燃えた跡や弾痕などは無く、キャタピラーのみが破壊されていました。恐らくは地雷でやられたのでし

う。いつの頃から此処に残されているのか潮風に晒されて車体には錆びが目立ちます。また、LTTEの宣伝ビラが何枚も貼られていました。浅瀬のずっと

う。いつの頃から此処に残されているのか潮風に晒されて車体には錆びが目立ちます。また、LTTEの宣伝ビラが何枚も貼られていました。浅瀬のずっと



エレファントパスに放置されていた政府軍戦車の残骸、後方の浅瀬にある鉄条網の向こう側には未処理の地雷と機雷が残されている

向こうには、日光を浴びでキラキラと輝いている海が見えます、戦車の残骸と輝いている海とのコントラストが不気味です。僕達が戦車を見ている間にも何台もの車がパライのLTTEチェックポイントを目指してエレファントパスを吹っ飛ばしていきます。まだ名残惜しそうな二人を車に連れ戻して、制限速度なんぞは無視してパライを目指して吹っ飛ばしたのですが、残念！

戦車の残骸の処には10分も居なかったと思うのですが、これが致命的な遅れになりました。チェックポイントに着いてみると困った事にゲートは既に閉じられています。全てに大まかなシンハラ時間と違って、LTTE時間は正確な様です。

パライのLTTEチェックポイントに着いたのは午後5時を僅かに7～8分回ったばかりでした。シンハラ時間ならば7～8分なんて誤差にも入らないくらいなのですが、此処はLTTEの支配地域内なので時間感覚が違うようです。エレファントパスで僕達を追い越して行った車は何とか制限時間に間に合ったようで姿がありません、僕達が本日の遅刻第1号というわけです。門番の兵士を捜しているうちに後続の車が次々の到着してきます。10台ほどの車が集まった頃にLTTE兵士が現われて、近くにあるLTTEキャンプ内の簡易宿泊所で明朝の開門時まで待つように告げて行きました。

僕はLTTEキャンプ内に泊まれる機会は滅多にないと、こうなったら良い経験だとワクワクしていました。遅れて着いた人達のうちのターミル人は諦めてキャンプの方に移って行きましたが、シンハラ人はLTTEキャンプと聞いただけで何か危害を与えられるのではないかと怖がっているようです。大した遅れではないのだからゲートを開けるべきだと、LTTE兵士に詰め寄っていますが相手にされません。友人二人も袖の下を渡そうとしましたが断られてしまいました。

既に時間は午後6時を過ぎていましたが、友人二人を含めて遅刻したシンハラ人達が集まって何やら相談を始めています。相談の輪から離れて一人でチェックポイントの様子を眺めていると、シンハラ人達が僕の方をチラチラ見ているのに気付きました。悪い予感がします。(続く)

▶ 日本スリランカ文化交流協会
http://homepage3.nifty.com/ceylon_1948/

「中国語で歌おう!会」9月の歌詞(詳細表紙参照)

duō lā A mèng
哆拉A梦

作曲：菊池俊輔

中国語歌詞：

xīn zhōng xǔ duō yuàn wàng
心中有许多愿望、

nénggòu shíxiàn yǒu duō bàng
能够实现有多棒、

zhǐyǒu duō lā A mèng
只有哆拉A梦

kěyǐ dài zhe wǒ shíxiàn mèngxiǎng
可以带着我实现梦想

kě ài yuán yuán pàng liǎn pàng
可爱圆圆胖脸胖

xiǎo xiǎo dīng dāng guà shēn shàng
小小叮当挂身上、

zǒng huì zài wǒ
总会在我

bù zhī suǒ cuò de shí hòu
不知所措的时候

gěi wǒ bāng máng
给我帮忙。

dào xiǎng xiàng de tiān táng
到想象的天堂

chuān yuè le shí guāng
穿越了时光。

duō lā A mèng hé wǒ yì qǐ
哆拉A梦和我一起

ràng mèng xiǎng fā guāng
让梦想发光

‘わんりい’ おたより会員の皆様、そして 入会をご希望される皆様へ

毎年4月から新年度になります。途中入会は、入会月によって割引があります。詳細は事務局にお問合せを。

年会費：1500円 入会金なし

郵便局振替口座：0180-5-134011 ‘わんりい’

‘わんりい’の名は、‘万里’の中国読みから付けられました。文化は万里につながるの想いからです。

主としてアジア各地から日本に見えている方々と協力し、講座、研究会、鑑賞会、展覧会等の開催など文化的交流を通して国や民族を超えた友好を深めたいと願っています。また、2月と8月を除いて年10回、会報‘わんりい’を発行し、情報の交換に努めています。

- ▲ 入会はいつでも歓迎しています。
- ▲ 入会すると‘わんりい’の全ての活動に参加できます。
- ▲ 活動の様子は、おたより又は‘わんりい’HPでご覧ください。問合せ：042-734-5100 (事務局)

2007年3月、ラオスの、山のモン族の村に、「ラオス・山の子ども文庫基金」の念願が稔って、山の子ども文庫「太郎の図書館」が完成し(‘わんりい’123号参照)、活動がはじまりました。以来、「基金」代表の安井清子さんは、年に3、4回くらい現地を訪ねて様子を報告されています。以下は、2009年3月の滞在日記です。

❁ 3月8日(日) 日曜日のあれこれ

朝、6時前に目が覚める。「やつら、起こしに来るのかな?」と思いつつ、顔を洗いに出ると、そこに、ケェとクーミエンが待っていた。

「パヌン、行く?」

「行くよ。ちょっと待ってて」

と、私は大急ぎで、顔を洗い、日焼け止めだけつけて、今度は運動靴をはいて行く。メドンも来る。お姉さんのガオジェがきて、

「だめよ、パヌンはまだ朝ご飯食べてないんだから、疲れちゃうでしょ」

とお姉さんらしく言う。爺さんとシェンも、そう言ったが、私がヌキアサシアシ出ていくマネをすると、笑って、「行くのかい?」と言うので、「うん」と言って出てきた。

朝、まだ人々は畑仕事には出ていない。夕方ではないので、私は今度は気楽である。

果たして、ねずみがかかっていたのは、クーミエンのわなだけだった。まだ死んでいなかったのを、もう一度わなに挟んで殺してしまった。結局は、投げてしまう。メドンは「ぼくにおくれよ。猫にやるから」と言っていたが・・・「だって小さいし、面倒くさいから」と。あとで家では婆さんが「どうして、持って帰ってこなかったの?もったいない」と言っていたが・・・もちろん、彼らは食べるために、ねずみをとっているのである。ただ、少年たちには、そのこと自体が面白いのであろう。

帰り道、彼らは、プラー・ンゲン・・・つまり、茅の芯の中の白い綿みたいなのを食べている。「カッカー」うまいのだそうだ。綿菓子みたいのかしらん?と私も噛んでみたが、なんのことはない。うまくない。まったく、子どもたちにとっては、何でもおやつなのだ・・・とつくづく感心。

彼らは、誰かの畑のエンドウ豆もとって生で食べている。これは、甘くておいしかった。ケェは「ハウシャーなあ、坊さんだよ」と言う。山姥が化けた大豆を食べてしまった「三枚のお札」の話とまた結びついた。

ケェが

「パヌン、あと何日いるの?」という。「4日かな?」と言うと、「1ヶ月いてよ、1年いてよお、そしたら、かいじゅうに会えるだろ・・・」という。何のことかな?と思ったら、「かいじゅうたちのいるところ」・・・なのである。マックスが、1か月、1年と1日船に乗って、かいじゅうたちのところへ行っただり結びついているのである。ケェという子は、見かけによらず・・・本当にロマンのある子なのだ。彼の頭の中にはひそかにお話がたくさん詰まってるらしい。そういえば、ケェが一番、悪たれ小僧、マックスに似ているのかもしれない。

れないのであった。



朝食後、再びハーターシェン(村の人々が、トウモロコシ畑を作っている山)へ。今度は、メドンとトゥーローが、メドンの父に牛に水を飲ませに行くように言われたのについていくのである。4歳の小さなトゥージェも来る。メドンは父親に、「いいか。11時には牛に水を飲ませにいけよ」と言われていたのだが、そこに辿りつくまで、なんと時間のかかったことが・・・やかまし村の「学校から帰るとき」と同じ・・・子どもがいかにかかり道をするか・・・というところ、あれこれ重なるところがあっておかしい。

彼らは、まず、茅の芯をやたらたくさん摘み、食べ・・・そして、とことこついてきたトゥージェを待ち、あれこれ寄り道をして、たったあれだけの距離(といっても、1km近くあると思うが)をかなり時間をかけて、牛の囲い場までついた。そのあとは見物であった。メドンは、・・・いつのまにか、あんなにたくましくなったのだろうか? トゥーローを指示しつつ、全部の牛を、ドドド～と怒涛のように追って、水を飲ませに行った。

牛は牛で、離されたら、他の牛と、角突きをし始めた牛もいる。闘牛というというのは、牛の習性でもあるらしい。その牛の戦う姿を見て、人間が考え出したお楽しみなのだろう・・・子どもたちは、興奮した牛に突かれないように、みんな斜面に上って、観戦していた。そのあと、メドンは、また牛たちを怒涛のように追って、囲いに戻した。怒涛のように走る牛たちと少年たちが、すきっと鮮やかであった。

ビーとゾンプーは手押し耕運機で、トウモロコシ畑にする土を耕している。これまでクワでやっていたことを思うと、村でも先進的な人たちなのであろう。ゾンプーが、耕運機にふられながら一生懸命耕していたのが、遠くに見えた。

それにしても、少年メドンは元気である。あんなに勢いよく牛を追っかけた後、赤い酸っぱい実を取りに山の斜面を元気よく、他の少年たちと上っていった。私とトゥージェは途中まで行ったが、これ以上、トゥージェを連れていくのは無理だと思って、途中で、敗退。トゥージェをおぶって、急斜面をまた下まで降りた。トゥージェは、

「パヌン、パヌン、みんないないよ。ぼくたちどうするの?」
と言ったり、下に降りた後は、

「パヌンは、実をとりに行かせなかった。ぼくも、実を取りに行きたかった」

と、しばらく、うらめしそうに機嫌が悪かった。ぼくも行けたのに・・・という思いと、きっと置いていかれて、みんなが戻ってこない・・・とても不安な思いで、待っていたのに違いない。

私はそのあと、さすがに水浴びをしたくて、家にいたが、メドンとトゥージェは、また畑へと行ったのである。メドンは、ビーの赤ん坊を背負って……。まったく少年たちは元気である。

❀ 3月9日(月)

昨日の少女は、もう母になった。

ニア・ビー(ビーの奥さん)が、赤ちゃんを背負い、「チ・チシアロー、チ・チシアロー、ツォーコアロー」と、歌うように言いながら、豚に餌をやりに行く。

少女はすぐ大人になり、否応もなく、母になる。モンの少女はすぐ大人になる。

母になりたての少女は、なんだか少し痛ましい。そんなに急いで母にならなくてもいいのに……。と、母になれない、少年志願の私は思うわけである。母になったら分別が必要で、夏の少年の無鉄砲さは持てない。もちろん若い母自身は、幸せなのである。みんなからも、幸せの象徴みたいに思われている。そんなことはわかっていても、あまりに若い母は、なんだか少しだけ痛ましいのである。

モンの人の子守歌は、あのお葬式の嘆きの歌とも、少し似ている……。と言えるかも。

あ～、チ・チシアロー

(怒ってるの、怒ってるの)

あ～、ツォーコアナー、チ・コア、チコアヨー

(泣かないで、泣かないの)

ポ・ポゲエオー、チ・コア、チ・コアヨー、

(おめめ見えるでしょ、泣かない泣かない)

フルー・ゴーオー、フルーフルーゴーオー、

(大好きよ、かわいいわが子)

まるでセレナーデのように、物悲しい響きでモンの人は、子どもをあやすのである。



まだ夕方だが、トゥージェがふとんをかぶって寝ている。「爺ちゃん、爺ちゃん、どこ?」と呼び、また「パマン、パマン」と呼ぶ。私がベッドのそばに行くと、布団の下から、トゥージェは歌をうたっている。

トゥージェは、母に捨てられた子である。モンであるから仕方ないし、トゥージェには母代りのおじいさんがいる。でも、きっとこの幼い丸顔の彼のどこかに、その傷はあるに違いないが……

子どものころ、「眠れないよお、ママー(そのころはママと言っていた)」と呼んでいたのを思い出した。少しでも答えてくれる……。それが安心であったのだ。眠れないよお……。と誰かに訴えて、それに応えてくれる人がいるのが安心で、寝た。

子どもにとって「安心」しているということが、どんなに大切なことか……。と思った。トゥージェは、母がいなくとも、トゥージェを愛していて、トゥージェを受け入れて答えてくれる人がいることを知っている。

兄ちゃんのトゥーローは前に比べてずっといい子になった。もともとヒネた子であると思うのだが、それでもよくす



る何かがこういう生活にはあるのではないかと考えた……。ばあちゃんを手伝い畑を耕し、ビーの赤ちゃんの世話をさせられる……。そういう生活が、トゥーローを育てている。また、居場所が決まった……。そのことも、少し、決心させたのかもしれない、もう母とは暮らせない……。そのことが微妙に、トゥーローとトゥージェと、そして爺さん婆さん、そしてみんなに、少しだけ、固めたものがあるような印象を受けた。

❀ 3月10日(火) 隣村へ本を届ける

隣村のパハウへ、本を届けに行く。

もう1年も前に行ったワークショップに、パハウの小学校の先生は欠席したため、渡すはずだった本が、そのまま残っている。それを届けにいこうというのである。ツィアとマイワと3人で行く。

女の急がない足は結構速くない。男の速い足では40分で行くというが、女の急がない足のスピードでは、1時間半ほどかかった。早朝はまだ肌寒かったが、すぐ暑くなる。乾いた土が、本当に灰色である。ハーチョオ(灰の谷)とこの村をモンの人々は呼ぶが、本当に土が乾いている時は、灰みたいなのである。

パハウ。水がなく、村人は緑色の池の水を飲んでいる。爺さんの話では、ここがこころで一番高いのだという。昔はケシも野菜もよくできたという。だから、こんな水のないところに人が住んでいるのだと思う。現在は車も入るそうだが、奥まった雰囲気はある。

なんとなく予想したとおり、いきなり来たせいではあるが、小学校は休みだった。ここは分校で、先生は一人だけ。ファムアという、若いおかあさんである。少数民族枠で、カンカイの教員養成学校に行った。そして、ここで先生をして、4～5年だという。二人の子どもがいるおかあさん。今日は、子どもが下痢をして調子が悪く、それで休んだそう。一人しかないから、当然、休校となるわけだ。学校は、小1と2で、32人の生徒。今回、57冊の本を渡した。

「とにかく、しまっていてはだめよ。とにかく、先生が読んでから、子どもたちにお話してあげてね」と言ったが、わかったらどうか?本当は、本を渡すだけでは、なかなか使われないのである。もう一度、先生たちを対象のワークショップを開く必要ありか……。と思う。

午後は、二人に来てもらって、図書館の片づけと整理をした。かなりすっきりした。(続く)

三年ぶりに訪れた宝石の湖は何も変わっていなかった。きっと何百年も何千年も前からこのままの姿でここにあったのであろうその姿で、私の目の前に青い水をたたえていた。白い氷河から流れ落ちてくる水が何故こんなにも青いのだろう。

「五色海(ウースーハイ)は何処にあるんだい？」

学生の一人が私に尋ねた。湖の名前は知らなかったが、私は即座に崖の上にあったもう一つの湖を思い浮かべた。底にしずんだ石や深度で微妙なグラデーションを作り色を変える青い湖は、確かに五色海という名前がぴったりだ。

「この崖を登ったところにあるの」

私が答えると、元気な男子学生達は我先にと競争のように崖を登りだした。この辺りまでくると4000メートルを越える標高で酸素はだいぶ薄くなっている。身体が重く息が苦しい。私とウィンと一緒にゆっくりと崖を登った。崖の途中で並んで腰掛け休憩すると、眼下には青い乳奶茶が丸ごと見える。

「とっても綺麗……。私、この旅行の事は絶対忘れないよ。あんな牛小屋に泊まった事も、こんなに綺麗な湖を見た事も。きっと元子がいなかったら来れなかった。ありがとう」

ウィンが言った。

たんなる行きがかり上、行動を共にする事になったウィンと私だったが、ほんの2日間とは思えないほど色々な出来事が凝縮された時間を過ごし、苦楽を共にしてきた私達の気持ちには国籍を超えた友情のようなものが芽生えていた。

崖を登りきると、まるで噴火口の様なすり鉢状の窪みの底に五色海がある。湖底に沈んだ石の一つ一つがそのまま透けて見える瑠璃色の美しい湖だ。窪みの縁に立って五色海を見下ろしていると、頭上から聞き覚えのある音が響いてきた。ゴトッ・ゴゴゴゴ・氷河に歓迎の言葉をかけられているような気がした。

一緒に登ってきた青年の一人が寄ってくると私に手を差し出した。

「本当に綺麗な場所だ。君がいなかったら俺達、この湖は見つけれなかったよ。ありがとう。」

彼の手を握り返しながら、私はくすぐったい気持ちだった。ウィンといいこの青年といい、ここは中国だっていうのに中国人の彼等に感謝されちゃうなんて、にわかガイド冥利につきるじゃないか。皆がこの場所に来られたことに満足しているらしいのが嬉しかった。

これで幻の湖とはお別れだった。しばらく窪みの縁から五色海を眺めると「さあ行こうか」といった感じでこの場

を立ち去る青年達と共にゾロゾロと山を下った。前回、一人で賽の河原を彷徨っているような心細さを感じながら長い時間過ごしたこの場所も、大勢の仲間と観光に来るのとではずいぶん印象が違うものだ。初めて来た時が一人ぼっちで良かった……。だからこそ、この場所をしみじみと深く味わう事ができたのだ。この日この場にいたウィンや学生達がいくら綺麗な場所だと感じてはいても、おそらくあの時の私と同じような気持ちで此処が強く心に残る事はないのだろう。

心待ちしていたこの場所への再訪があまりにアッサリと終わってしまった事が何処か物足りなく心残りのまま、私は二つの湖に別れを告げて山を下った。

洛絨牛場の老女の小屋に戻った時には、そろそろ午後遅い時間になっていた。

既に老女や小屋の子供達とも馴染んでしまい、みんなで囲炉裏の周りに腰掛けお茶を飲んで休憩させてもらった。小さな赤ちゃんがダンボール箱の中に布団の様なものと一緒にぎゅうぎゅうに詰め込まれ、立ったまま眠っているのがとても可笑しくて可愛いらしい。カメラを持っていなかったのが残念だ。

ウィンと学生達はそのまま下山して自然保護区の入り口まで戻り、そこでタクシーを拾って稻城まで戻るとの事だった。たった2日間とは思えない濃い時間を一緒に過ごしてきたウィンともここでお別れだ。雲南省を旅していた時に買ったという民芸調のプレスレットを「記念だよ」と私の手首にはめてくれ、私達は抱き合って別れを惜しんだ。

一人この場に残り洛絨牛場を立ち去る彼等を見送るとフゥ…と息が漏れた。いくら洛絨牛場に愛着があるとはいえ、これ以上一人で昨夜の物置小屋に泊まる気はなかったが、私はもう少しこの場をゆっくり味わいたかったのだ。

三年間ずっと心の中で温めてきた洛絨牛場は私にとって特別な土地になっていた。やっと願いがかない再びこの地に訪れる事が出来たというのに、昨日から今までがあまりにあわただしすぎたのだ。一人でゆっくりとこの場所を感じたかった。

夕暮れが近づき空気が冷えてきたためか、神の山「央邁勇」が再びその姿を現していた。小屋の中では囲炉裏がトロトロと暖かそうな炎をあげ、急に静かになった小屋の周りでは幼い女の子が家事の手伝いをしたり家畜の世話をしたりと甲斐甲斐しく働いている。気温が急速に下がり始めていたが、薄着のまま冷たい水に手をひたして働いている彼女に「寒くないの？」と尋ねると首を振り、「働き者だね」と声をかけると、少しはにかんだよう

に笑顔を浮かべる。「央邁勇」を指差して「好き？」と尋ねると大きく頷いた。まだ10歳だという少女の顔には凜とした美しさと民族の誇りが感じられた。

小屋にザックを預けたまま、日暮れ近くまで洛絨牛場を歩き回った。今後垂丁でどう過ごすかなどの予定は全く立てていなかったが、暫くこの地に滞在したかった。宿はくやしいけれど沖古寺しかないだろう。昨日は啖呵を切って飛び出してきた沖古寺に今日再び泊まりに行くというものだが、流れでそうならざるを得ないのだから仕方ない。

小屋にザックを取りに行くと、無口な小屋の老女が小さく笑みを浮かべながら「また来年おいで」と声をかけてくれた。最初に出会った時は頑なに私達を拒絶していた老女の打解けてくれた言葉がなんだかとても嬉しかった。やっと垂丁が私を受け入れ始めたくれたような気分だ。誰もいない道を央邁勇が見えなくなるまで何度も何度も振り返りながら洛絨牛場を後にした。

沖古寺にたどり着いたのはすっかり暗くなってからだ。入り口近くで昨日洛絨牛場で出会った管理人の腕章をつけた男が現れた。

「小姐、昨日は何処に泊まったんだい？」

どうやら私の事を覚えていたらしい。牛番小屋の老女に迷惑をかけたくなかった私は「森で寝た」と答えたが、「嘘は判ってるんだぞ」と言った顔で管理人はニヤニヤしていた。なんだか嫌な感じだったが管理人はそれ以上は追及せずに私の大きなザックを取ると先に立って歩き、沖古寺の宿屋の入り口で「お客を連れてきたぞ～」と呼びかけると、中から欲が顔に張り付いたような顔をした強欲そうな宿のオヤジが出てきて、やはり私を見るとニヤニヤした。

「泊まりたいの」

「60元だ」

あれ？ 学生達に尋ねた時には部屋代は40元だと言っていた筈だ。

「もっと安い部屋は!？」

「50元だ」

「もっと安い部屋!!」「大部屋だから良くない」

「いいの」

「50元の部屋がいいぞ」

「いいの!! 私は安い部屋が好きだから」

「じゃあ 40元だ」

親父と部屋代の事で押し問答していると奥から昨日の強欲そうな女将も出てきて私を一瞥して、やはり昨日の事を覚えているのだろう「そらごらんなさい」といった感じでフンと笑った。まったく此処の宿の人間は虫が好かないが、朝からの登山と重い荷物を背負っての牛場からの下山でフラフラだった私は、意地を張る気力などとうに無くしてどうでも良かった。

案内されたのは七人部屋だった。全員が横一列に並んで眠る細長い小屋だ。畳一帖ほどが自分のスペースでち

ゃんと布団も置いてある。ゴミの散乱する物置小屋で寒さに震えながら眠った昨夜にくらべれば天国のように快適だ。小さなザック一つで遊びに来ていた中国人の先客達が私の大荷物を観て声を上げた。「あれま、あなたここに何しに来たの!？」

全く自分でも苦笑してしまう。私はいつだって自ら望んでしなくてもよい苦勞をしてしまうのだ。それでも私は満足していた。意地になって運んだ荷物は、私の望み通り洛絨牛場での昨夜のキャンプ(?)であますところなく利用したのだ。

部屋に荷物を置いてホッとすると、空腹を感じた私は再び食堂兼事務所になっている母屋に向かった。まったく何度見ても強欲そうな顔をしている宿のオヤジに食事がしたいと告げると揉み手をしそうな勢いで言った。

「小姐、何が食べたいんだ？」

「麺がいい」

「麺？ 麺なんか無いさ。おかずを2、3品取って白米を食べろよ」

「麺がいいの!! 疲れてご飯なんて喉を通らないわ!」

垂丁にやってくる前に稲城で出会った上海小姐から、垂丁の食事は下界の何倍も高い事や麺料理がある事だって聞いていたのだ。

私が食い下がると、オヤジは台所に何事が叫んでどこかに行ってしまう、程無くして一杯の汁麺が運ばれてきた。何だよ、ちゃんと有るじゃないか。いちいち面倒くさい宿だ。宿の親父が顔に出ている通りに強欲なのが逆に可笑しくて笑ってしまう。

夜になると急激に気温が下がる垂丁の夜に麺の温かさが身体に沁みて、トマトと玉子の入った優しい味の麺はとっても美味しかった。宿に着いた時間が遅かったせいもあり、私が麺を食べている間に食堂には誰もいなくなってしまった。何となくそのままにして席を立つのも気がひけたのでお椀を台所に運んでいくと、中では炊事係の若者が振り返って笑顔を見せた。

「ご馳走様～! とっても美味しかった。うわあ、此処はあったかいねえ～!」

台所の中はカマドの火で暖かく、寒いのが苦手な私が思わずカマドに手をかざしているのを見た若者が「小姐、こっちへ座りなよ」と台所の裏口を指差した。覗いてみるとカマドの裏側の壁には薪がくべられるように穴が開けられ、その前にはベンチがあった。まるで暖炉の前に座っているように暖かく、背後には垂丁の森の静けさがたちこめている素敵なお場所だ。暫くの間そこに座って、仕事を終えたらしい若者と他愛も無い話をして過ごしているウチに身体だけではなく心も温まってきた。

思えば垂丁にやって来て以来、初めて純粋な笑顔を浮かべ普通に話してくれる村人に出会えたのだ。

慌ただしかった垂丁の2日目の夜が更けていった。

(次号に続く)

“挫折” 広辞苑によると「計画や事業などが途中でくじけ折れること。だめになること。」とある。2008年10月3日、中国河南省の省都鄭州の、空港職員に車椅子を押されて、帰国する私を見送りしてくれた小梅夫婦に涙で別れを告げた時、わたしの心はこの“挫折感”でいっぱいだった。おそらくもう戻っては来れない、この先どうなるのか・・・さっぱりわからない。いや、この結果はある程度わかっていたのだ。一縷の望みを抱いて通ったここ中国の鍼灸治療も効果なく腰椎から右大腿部、ひざ裏にかけての痛みとしびれは治まらなかったのだ。

2007年3月、定年より3年早く退職した。仕事に行き詰まっていたし、何より持病のリウマチが悪化していた。辞めた直後の4月5月はひたすらベッドで過ごした。もともと、わたしは08年退職し、その年の8月末、中国へ留学する！と予定していた。“留学する”には、クリアしなければならない問題をいくつも抱えていた。早く退職したことは、これらの問題解決のために役立った。しかし、今、思えば退職したその年、すぐにも中国へ“留学”すべきであったのだ。

08年8月、友人たちと青森のねぶた祭りに出かけた。久しぶりの新幹線の旅、気の置けない仲間との楽しいおしゃべりや日中のレンタカーでの探索。三内丸山や斜陽館、縄文の遺跡に湖散歩。夜毎の激しい彩りの灯りの世界、立体武者絵と跳ね人(人間)のコラボ、まさに血沸き肉踊るひと時であった。



中国大使館でのビザ取得も済み、1年間の車運転のための国際免許も取った。9月3日の航空チケットと帰国用のオープンチケット、迎えてくれる小梅夫婦の電話番号、到着日に宿泊するホテル、準備万端手抜き無し。はて、この右側の大腿部の痛みは何だろう・・・？いつもの整形外科で写真を撮る、異常なし。ほっとするも、ひょっとして坐骨神経痛では・・・？ 主治医の「中国？ 行かないほうがいいよ」の言葉にも耳を貸さず、半年分の薬をリュックに詰め込み、わたしは出発したのだ。

留学先の河南省開封市は中国六大古都のひとつ。古えより幾多の民族興亡の都。とくに北宋時代の開封を舞台にした明時代の小説“水滸伝”で有名なところだ。国宝となり故宮博物館所蔵の“清明上河図”は往時の賑わいを表し、その絵巻を復元したテーマパークが近

年出現している。中国版日光江戸村の感あり、だが敷地はもっと広く、運河に浮かぶ船上では中国版大岡裁き、包公の時代絵巻が見物人を楽しませてくれる。徹底しているのは、食事処も酒を売り歩く男も売店も路上パフォーマンスもみな、北宋時代のつくりと服装なのだ。

わたしが1年間留学する(予定だった)河南大学は清時代の城壁に囲まれた開封市の北側に位置する。更に北側には鉄塔が、高さ約56メートルのスマートな美しい姿を河南大のキャンパスから見る事ができる。この鉄色の煉瓦の塔に10数年前上ったことがあるが、観光客が落下したからという理由で今は上れないよ、と同級生が語った。しかし真偽のほどは不明。

市の南側に開封駅があり駅からまっすぐに北に走る北門大街をたどれば河南大学に行き当たる。暴れ竜、黄河の南に位置する故に度々の大氾濫により土中に没し、現在の開封市の地下には明代の都市があり、更にその下には宋代の都市が眠っているという。春秋時代から歴史書に登場するこの都市はBC364年、魏の国都となる。現代まで6層にもなる時代が地層になっているのだという。

わたしが、中国語を学び始めてかなりの年月を指折るのだが“緻密な学習の積み重ね”という語学に必要な“努力”ができない。生活と遊びの中で、せめてヒヤリングができれば、等と不埒な考えで中国留学を決めた。街を歩き、買い物をし、映画を観て、食事をしたり、そんな中で最小限度の日常会話をマスターしよう、と。

初心者クラスに入った。学生は若い。年寄りは3月まで小学校の教員だったという男性Iとわたし。河南大学に毎年3週間ほどの短期留学生を送る三重県の、ある女子大からの3名。アメリカ人2名、ベトナム人1名、韓国人1名、ロシア人1名(すべて男性)。9月の中ごろにカザフスタンから男女2名ずつが入ってきた。かつて、日本人留学生が最多であったが、今は減少傾向にある。若いアメリカ人の中国語は十分に上手く、わたしは興味をもったが、彼は授業終了と同時に席を立つので話しかける事ができず、残念だった。

中級クラスは若い日本人男性が1名在籍していたが、どんな国から何人が、どんな学習をしているのか、何もわからなかった。ただ、宿舎の部屋の向かいに住む、にぎやかな韓国人女性3名は中級クラスで、そのうちのスレンダーな彼女は、18歳のロシア人とデートしているのを何度か見かけたものだ。我がクラスの韓国人

男性はハーレー風大型バイクを入手し、キャンパスをブイブイ飛ばしていた。

私たち日本人の助っ人は留学して4年になるという男性Kが、開封大学の講師をしながら微に入り細に入り面倒をみてくれた。日本語学科の学生との交流や、日本人同士の親睦、困った時の対処の仕方等々。もともと日本人女子大生は4名いたのだが、^{ジャッキー} 宿舎の改造大工事のため埃と騒音、慣れない中国の環境と真夏の暑さに倒れた1人が早々に帰国したときも、Kは大学の国際交流処の職員よりも、すばやく対応していた。その彼も9月末に日本へ帰国。

朝8時半から授業が始まる。わたしは6時起床、簡単な朝食を済ませて、教科書を揃え、テレビを見ながらコーヒータイム。8時には部屋(宿舎の部屋は5階でエレベーターなし)を出る。キャンパスが広いのだ、2～3度迷子になった。杖をつきつつゆっくり歩く。振り返れば、白色の、外目には立派な宿舎が見える。重厚な建築群の間を抜け、研究生棟へ向かう。

研究生棟の2階、月曜日から金曜日の午前中5日間、1日2コマの授業、総合技能・聴力・口語の三科目を学習する。教師は3人とも女性で、英語を交えての授業は、わたしにとっては初心に帰り、楽しかったものだ。

中秋節、農曆8月15日、総合技能の趙老師は月餅を学生ひとりひとりにプレゼント、その甘い餡の中身を楽しんだ。午後は、水曜日のみ太極拳の授業があったが1回も参加が叶わなかった。この研究生棟はトイレが和式(中式か)、催すと急ぎ宿舎に戻らなければならない。トイレといえばわたしが通った鍼灸の大きな病院にもトイレが無い。外の公衆便所を使用する、ため息をつきながら我慢する。

「キャピキャピの女子大生が去ったら、このクラスは、じじばばだけの日本人だね。」私より1歳年長のIは寂しそうに言った。「ばばも去ることになると思います。」授業開始から2週間も過ぎた頃、腰と大腿部の痛みは寝ても起きても楽にならず、痛み止めの坐薬を使用しても日に日に苦痛は増すばかりになっていた。初回小梅と一緒にもらった第一中医院での鍼灸治療も、授業のあと三輪タクシーを拾いひとりで出かけ10回を数えようとしていた。小梅は日本に留学しているSの母親で、日本に生活の基盤を置いている昔からの知り合いGの姉にあたる。知り合いというだけで、本当に世話になった。「食事しているか?」「シャワーは使えるか?」「欲しいものはあるか?」度々宿舎に、たくさんの食料を抱えて来てくれた。ある日の事、「嘉陽、1階に引越ししましょう! 従業員には交渉済みだよ~」

と、荷物をベッドのシーツにくるみ、おろおろしているわたしを尻目にさっさと、しかも何度も階段を行き来し引越しは完了した。ありがたかった。階段の上り下りは、できるならば一往復で済ませたい、そのために空腹で過ごすことも厭わない・・・と思うまでになっていた。小梅夫婦はそれ以外にも、家族の誕生会や、自宅、親戚の紅姐の家にも招待してくれ、北京パラリンピックのテレビ中継を楽しんだものだ。

「もう足の痛みに耐えられません」と日本の友人に、「坐薬を急ぎ送ってください」と娘に、メールを送った。友人からは「歩けなくなったらどうするの! 帰っておいで」と、娘からは「60錠しかおくれられないよ~」と、返信がきた。この坐薬を使い切ったら帰国しよう、と決心。頸椎を手術した主治医からは「寒くなれば悪化する、帰国しなさい!」とありがたいメールが届いた。

大学の正門前には学生相手の一杯飯屋が並ぶ。1元から3元(16円から48円)で、熱々のうまい米線(米で作ったラーメン)、飯の上に野菜炒めがかけてあったり、カレーライス風ご飯等、様々なおいしい食事ができる。私は朝飯はパンと果物、日本から持参したインスタントのスープ。昼食は授業の帰りに簡素なこの一杯飯屋に足を運んだ。夕食はカップラーメン、果物。鍼灸治療の帰路、街のあちこちのリヤカーの売店で買い求める。梨、りんご、葡萄、キーウイ等。開封は西瓜の名産地だが、もうどこの店でも探せなかった。河南省の省都鄭州から開封までの道路の両側に西瓜を山盛りしたリヤカーが並ぶのを見たのは、いつの事だったのだろう・・・。

わずか30日間の悲喜こもごもの学生生活。開封市で旅行社を経営しているOさん、日本語教室を開いているWさん。食事に誘ってくれたり、ケータイ電話の購入に付き合ってくれたり、電動ポットを探して夜中に宿舎に届けてくれたり。包餃子はご一緒に、自宅に招待していただいたり、娘からのEMSの行方を捜しあてていただいたり・・・。たくさんの人々にお世話になりながら、お礼もできずに帰国となってしまった。

帰国後はすぐに入院、右股関節の手術、リハビリを経て今年2月に退院。4月に復学したいという希望も叶わず、やがて1年が過ぎてゆく。

国慶節の休暇の1日、テーマパーク“清明上河園”で遊んでくれたIとS。Iは、昨年12月緊急帰国、年が改まるのを待たず、肺がんで亡くなった。河南省開封市。そこに住む人々のあたたかい親切と細やかな気配り、1年をすごせば凶々しいわたしの野望も少しは果たせただろうか・・・。

四川省在住の大川さんから四川大地震で壊滅した、当地の交通網復旧のルポを頂きました。

昨年5月12日の地震から1年2ヵ月ぶりに都江堰～映秀～臥龍～巴郎山のルートを通りましたので状況を取り急ぎご報告します(2009年7月5日)。

1. 都江堰

鉄筋コンクリート建て家屋が多い都江堰の町はほとんど地震以前と同じで、見慣れたバスステーション界限でも建物の一部に壊れた箇所が見えただけでした。

テレビ放送されていた倒壊した家屋は建築工事上の問題(当地では少なくない)が大きかった一部の建物に限られるように見えました。



2. 都江堰～映秀

地震による山崩れで岷江に沿った従来の道が使えなくなったため、都江堰～映秀の区間はほとんど地震前から建設中だったトンネルの中です。

これは今年5月に開通した岷江の北側をショートカットするルートで、地震の原因とされて(中国国家地理2008年6月号)水位を下げた新しいダムを横切りました(地震直前に完成していた横断橋)。風景は楽しめませんが、所要時間が地震前の1時間から15分に短縮されました。

3. 映秀～臥龍

トンネルの外へ出たら、そこが臥龍溪谷の入り口でしたが、景観が一変していて何処に出たのか判りませんでした。

樹木に覆われた美しい溪谷は姿を消し、地震による地滑りで脆い岩肌が露出した急斜面が続く殺風景な谷に変わっていました(写真1)。

道路脇には大きな岩が堆積し、谷の斜面は雨が降ったら落石や土石流が頻発しそうな事が一見して判りました。

ショベルカーやブルドーザーが彼方此方で作業して



写真1 樹木に覆われた美しい溪谷は姿を消し、地震による地滑りで脆い岩肌が露出した急斜面が続く

いますので落石や土石流は直ぐに片付けられますが、雨が沢山降っている最中は通らない方が良いでしょう。

このような状況では川岸に沿って道を復旧しただけでは危なくて通れない箇所が多いため、要所要所でトンネルが掘られていました(これを見て都江堰～映秀の道路がほとんどトンネルの中だった事と中々臥龍ルートを正式開通できない事に納得がゆきました)。川岸に沿った道では彼方此方で崩れた斜面を護る工事が進められ、短時間ですが数ヶ所で待たされました(写真2)。

崩れ落ちた岩が川を埋めて水位が上がったために住宅の廃墟の中を川の濁流が洗っている所もありました(写真3)。

破損したため水門を開け放ったダムも見えました(写真4)。

地震による大規模な地滑りは臥龍の手前の耿達(映秀

から約20km)までで、それから奥では急減しています。道路も問題なく走れました。

臥龍^{パンダ研究センター}熊猫研究中心の周辺でも地滑りはほとんどありませんでしたが、パンダは雅安へ避難したままで門が閉じられ閑散としていました(パンダが初めて見つかったのは雅安の山奥で、臥龍と同じ研究中心があります)。臥龍の町の民家のほとんどは崩れたそうで急ごしらの集合住宅が並んでいましたが、2000年代に建てられた博物館等の鉄筋コンクリートの建物はほとんど壊れていませんでした。この辺の事情は都江堰や四姑娘山の日隆と同じようです。

4. 臥龍～日隆

臥龍から巴郎山にかけての地滑りは更に少なかったです。

地震の前から続けられている道路の拡幅工事が未だ終わらず舗装もされていませんが、道が広くなった場所が多いので通り易かったです。

映秀から日隆までの所用時間は道路工事の待ち時間を含めて5時間30分でした。巴郎山では青赤黄の3色のポピーの花が見ごろでした。

●大川さんのホームページはこちら

蜀山女神-四姑娘山

<http://www.sgns.gov.cn/scholaweb/conts.htm>

王女谷-東女国残影

<http://www.sgns.gov.cn/scholaweb/queenvalley.htm>



写真2 川岸に沿った道では彼方此方で崩れた斜面を護る工事が進められ、短時間だが数ヶ所で待たされた



写真3 崩れ落ちた岩が川を埋めて水位が上がったため、住宅の廃墟の中を川の濁流が洗っている所もあった

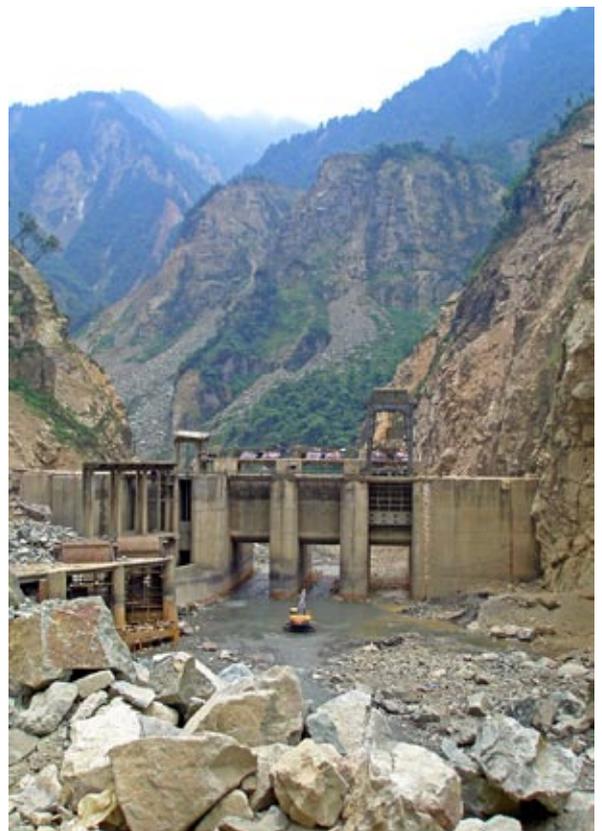


写真4 破損したため水門を開け放ったダムも見えた

中国を読む(61)

「深夜特急3 インド・ネパール」「深夜特急4 シルクロード」
「深夜特急5 トルコ・ギリシャ・地中海」「深夜特急6 南ヨーロッパ・ロンドン」
沢木耕太郎著 新潮文庫

旅も続けていくうちに日常になるらしい。最初は、すべてのことが珍しく興奮した旅も、それが日常となってしまうと「どのような経験をして、これは以前にどこかで経験したことがあると感じてしまう」のだ。勢いで飛び出した日常の、その向こう側には、やっぱり日常が広がっている。著者は旅慣れた、もっといえば旅ずれた雰囲気をもとにしながら、ロンドンまで向かっている。

「旅は人生に似ている」と著者はいう。「どちらも何かを失うことなしに進むことはできない…。ただ、と勝手に思うのは、旅の寿命を迎えて終えたということは、ひとつの人生を体験できたということではないか。だからこそ、人は大きな旅を終えたときに、ちょっと違う心持ちになって帰ってくるのかもしれない。

本書の前半部分で、著者は新しい体験をし「またひとつ自由になれたような」気になっていく。しかし、オランダ人の若者が、全財産であるはずの硬貨6枚を、物

乞いの子ども2人と自分を合わせて三等分に分け合っている行動を見て、「一気に自由になれたように」思う。自分の行動に理由はいらぬ。やりたいからやり、やりたくないからやらない。その結果、死ぬことがあれば、「そのまま死んでいけばいい」。そのシンプルなのが、「自由」なのだと著者は知る。このシンプルさは、結構

難しい。気が付けば、私の日常は、なんと「理由」や「言い訳」の多いことか。それらをすべて削除してしまえば、さわやかなシンプルライフになるとしても。

旅という擬似人生を一度生きて、全体を見渡してみれば、自分がたくさんの小さいことに捉われすぎているかに気が付くのだろう。

人生全体から見ればちっぽけなことが、その時は重大事に思われてしまうけれど、ちょっと過去を振り返っただけでも、「あのとき、どうしてあんなに悩んでいたんだっけ」と思えることはいくつもある。人生の俯瞰図一枚で、人は結構強くなれる。 (真中智子)



映画「犬と猫と人間と」(監督：飯田基晴 2009年/ハイビジョンビデオ/118分)

http://homepage2.nifty.com/lowposi/lp_work_independent_02.html

於：ユーロスペース(渋谷) 10月中旬ロードショー上映予定 問合せ：☎03-3461-0211(ユーロスペース)

7月の末に偶然、NHK「クローズアップ現代」が、空前のペットブームの陰で、捨てられてゆく犬達を取材し報道していた。現在のペット産業は、1兆円を超える規模といわれ、不況の中で更に拡大を続ける。が、処分される犬は毎年10万頭に上るといふ。この番組は、ご覧になった方も多いかと思うが飼い始めたものの失業したり、手に負えなくなって捨てられる犬、ペットブームにあやかろうと、繁殖を試みたものの過当競争になっていて思うように販路を広げられず放置される犬等の末路に目を覆いたくなった。

この放映に先立つ一週間ほど前、今年の春にクランクアップした上記映画「犬と猫と人間と」の試写会に招待を受けていた。我が家の近所でも、「犬を散歩させる人が増えたな」と漠然と感じてはいたものの、ペットとは縁のない生活で、他の人が飼っているペット、主として猫を触らせてもらって満足する程度でこの映画に深い関心を持っていたわけではなかった。知らなかった! である…。そしてペットの問題は知らなかったではすまない命の問題が関わっているのだ。このように述べると、いかにも暗い目を背けたくなる映画のような印象を与えてしまいかねない。しかし、カメラは日本各

地の愛護協会や愛護団体や救済施設を取材し、置かれた環境にめげない個性的な犬や猫たち・しろえもん、にゃんだぼ、がじろう、デニーやサンデーを追い、人間同様の感情の動きをみせる犬や猫たちの表情を写し、ユーモラスで可笑的。

現実の厳しい場面もあるが、それらの場面を含めてこの映画を見た後の気持ちはむしろ清々しく、犬や猫、そして命あるものが、私達人間の同胞のように愛おしく、この者たちと共生できる望ましい環境づくりを考えたくなる。

映画はイギリスを取材し、そんな環境づくりの可能性への指針を提供すると共に、戦時中の犬の状況をも調べ、日本動物愛護協会でも勤めて来た獣医師・前川博司氏が「動物を可愛がる精神は、人間が平和で裕福でないとき」という言葉の真実を実感させる。

毎年11月に開催されてきた「町田発国際ボランティア祭・夢広場」が今年も11月1日(日)に開催される。サブタイトルは「この星に平和と希望を」である。この祭開始当初より「NPO・フレンズ オブ アニマルズ」という団体も参加している。民族や国の共生だけではなく地球上の全ての、植物も含めた命あるものとの共生を考える祭でありたいと改めて思った。(田井記)



犬と猫と人間と

Dogs, Cats & Humans

飯田基晴 監督作品

いのちを
愛する
犬と猫と
人間と



沸き立つ音楽! アジアをつなぐ三夜 アジアの音楽家たちがいま熱い!

アジア オーケストラ ウィーク 2009 2009/10/2(金)～2009/10/4(日)
<http://www.orchestra.or.jp/aow2009/index.html>

於：東京オペラシティ コンサートホール 問合せ：日本オーケストラ連盟 03-5610-7275

S席-3,000円/S席ペア-2,500円/A席-2,000円/B席-1,000円 (S席ペアは、2枚単位) *各プレイガイドで発売中
 主催：文化庁芸術祭執行委員会 協力：東京オペラシティホール他

- 2009/10/2(金) 19:00開演
 サン=サーンス(チェロ協奏曲第1番イ短調)／他……………タイ・フィルハーモニック管弦楽団(タイ国)
- 2009/10/3(土) 18:00開演
 ラフマニノフ(ピアノ協奏曲第2番ハ短調)／他……………武漢管弦楽団(中国)
- 2009/10/4(日) 15:00開演
 メンデルスゾーン(バイオリン協奏曲ホ短調)／他……………インチョン・フィルハーモニック管弦楽団(韓国)

ご予約を! 【スライドとお話の会】 土の香り溢れる中国の民間芸術 〈中国農民画の魅力を知る〉

1枚1枚、手描きした中国農民画絵には農民達の夢や希望、生活や行事などが色鮮やかに表現されてとても魅力的です。スライドや実際の作品を見て頂きながら中国農民画の魅力をご紹介します。

於：町田市民フォーラム
<http://www.city.machida.tokyo.jp/shisetsu/com/com14/>

2009年10月12日(祭) 14:00～16:00

参加費：無料 定員：30名(先着)
 お話：平野理絵(日本/中国農民画協会代表)
 主催：日中文化交流市民サークル 'わんりい'
 協力：日本農民画協会
<http://nouminga.web.fc2.com/>

申込み&問合せ：☎042-734-5100 'わんりい'
 E-mail: wanli@jcom.home.ne.jp



【表紙写真の説明】

中央の女性は、2人の子供を育てるシングルマザー。3人の親戚の子供たちは、学校が休みの一ヶ月間滞在中。ケニアの親戚付き合いは、とても親密である。子どもたちは休みになるごとに親戚の家に滞在し、親族の絆を深める。時には、親しい友人同士でも行われる。子どもたちは、自分たちで旅を計画し、親と一緒に滞在しない。子どもたちは、こうしていろんなことを学ぶ。

【'わんりい' お料理交流会】

アイディアの餡が生きる 〈手作り月餅の会〉

最近では中国でもあまり手作りされなくなった月餅ですが、自分で作ればいろいろな餡を詰めた話題性のある美味しい月餅を作れます。10月3日は旧暦の中秋。今年のお月見は手作り月餅を頂きながら名月を鑑賞しませんか。

*詳細は、'わんりい' ホームページをご覧下さるか、お問合せください。

■9月20日(日) 10:30～14:00

■於：三輪センター(町田市地域センター)
 〒195-0055 三輪緑山4-14-1 ☎044-987-1951
<http://www.city.machida.tokyo.jp/shisetsu/com/com13/index.html>

■参加費：実費(1500円~2000円)(要予約)
 ■対象：'わんりい' 会員と関係者 先着：15名

●予定メニュー：

- ▲月餅4種類(小豆餡・ナッツ餡・南瓜餡・サツマイモ餡)
- ▲薄餅に中華のおかずを包んで食べてみよう!
 - ①春雨と野菜の和え物、
 - ②豚肉細切りの北京味噌炒め
 - ③胡瓜、葱の細切りと甘味噌
- ▲中華風サラダ&中華スープ

●持ち物：エプロン 筆記用具
 ●申込み&問合せ：☎042-734-5100 'わんりい'
 E-mail: wanli@jcom.home.ne.jp

【9月の定例会】 9月14日(月) 13:30～

●10月号のおたより発送日 9月29日(火) 13:30～
 共に 於：田井宅